神いやし　我ら仕える

AHI 愛知国際病院

MARCH 1981

GOD HEALS, WE SERVE

ホスピスだより

2016

〒470-0111 愛知県日進市米野木町南山 987-31
電話　代　　表（0561)73-7721
ホスピス（0561)73-3191

題　字　　川原啓美

私たちのホスピスをつくり続ける
ーホスピスボランティア20年を感謝します

愛知国際病院　院長　太　田　信　吉

愛知国際病院にホスピスを作りたいという思いは、愛知国際病院が基準看護を獲得することから始まりました。そして1995年10月愛知国際病院に、愛知ホスピス研究会、名古屋YWCA、豊田ボランティア協会の方々が集まりました。愛知県で最初のホスピス：がんの患者さんがその人らしく過ごすことができるところを作ろうと集まったのです。こんなホスピスを作りたいと夢を語り。資金集めをどうしよう、場所をどうしようと話し合う中でみんなが力を合わせて具体化するができました。1996年9月に病院ボランティア「紫苑」が発足しました。市民の方に募金の呼びかけも行い多くの方のご寄付で最終的には1億円の目標に達することができました。その呼びかけ文には、あなたに「ホスピス」という自宅を提供しますとありました。その思いは今も引き継がれています。またそのことを記録した「私たちのホスピスをつくった」（日本評論社）の中で、川原啓美先生は、「共に働くスタッフ全員の協力を得て、よりよいケアのできる場所にしてゆきたい、と切に願ってきた。それは「ケアから参加へ」の具現である。「コミュニティ（地域）」とともに、そしてそれに支えられて」、これも現在までの病院の運営の中でいつも心がけてきたことである。」とはじめに書かれました。

そして1999年3月にホスピス開設式を行い、4月に愛知県で最初のホスピス病棟はオープンいたしました。それ以後も多くの市民の方に支えられて今のホスピスがあります。小さな病院が多くの方の力を受けてホスピスを作り、また様々なスタッフが集まり、がんを持ちながら精一杯生きる方たちとそれを支えるご家族と共に歩んできました。今では愛知県にも１７カ所のホスピス・緩和ケア病棟があります。その中でこの６月にホスピス市民公開セミナー「ホスピスってなあに」を開催し、さらに終末期の看護ケアを支える看護師が学ぶプログラムELNEC-Jも愛知国際病院で開催するなど、このホスピスから情報を発信する働きも再開しました。地域とともにあり、地域に支えられる病院として多くの皆様に感謝しながら、しっかりと歩んでゆきたいと思います。これからもよろしくお願いいたします。

地域連携クリニックのご紹介

在宅医療
マーガレット・クリニック　院長　松　尾　大　志

はじめまして。平成27年3月3日に名古屋市天白区平針にて在宅療養支援診療所として、マーガレットクリニックを開設いたしました。生まれ故郷にて微力ながら地域医療の一翼を担うことができることを大変うれしく思っております。

循環器内科を専攻し急性期医療の経験を積んだ後に、在宅医療の道へ進み、在宅でがんの患者様を診させていただくなかで、がん患者様などを対象に、体だけでなく心も含めた苦痛を取り除いてサポートを行うホスピス緩和ケアに強く惹かれるようになりました。

以前、心より尊敬する先生より、『ホスピスというと、終末期の患者様が入る“施設”だと思っている方が多いかもしれませんが、そうではなく、積極的な治療法がなくなった患者様とご家族様の心や体の痛みを取り除き、支えるための“実践哲学”である。そのために行うのが「緩和ケア」である。』と教えていただきました。

そのようななか、平成28年4月より、由緒ある愛知国際病院ホスピスとの連携を実現させて頂くことができましたことを大変光栄に思います。

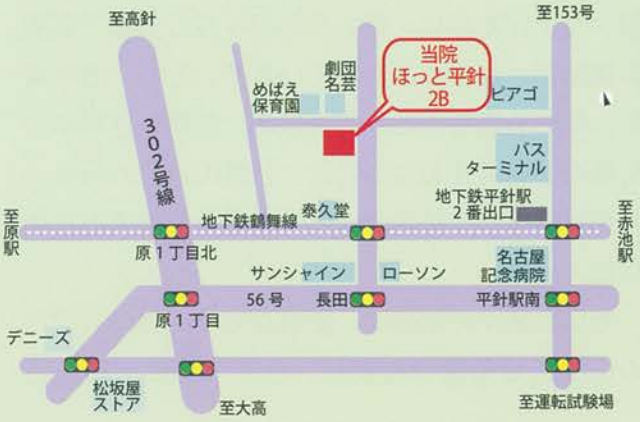
終末期の患者様のためのホスピスは、通常、急患は受け付けません。しかし、連携を結ばせていただいていることにより、事前に患者様の状態について情報共有を行うことが可能となり、症状が重くご家族様がご自宅でケアしきれなくなった際の入院にも対応していただけるようになります。死と向き合い、自身のこれまでの人生を振り返りながら、残された貴重な時間を過ごす療養場所として、ご自宅だけでなくホスピスが選択肢となりうることが当院の患者様やご家族にとり非常に重要であると考えています。

今後求められる医療は、病院完結型医療ではなく、地域完結型医療であると言われています。すなわち、地域の診療所、病院、ホスピスなどが連携し、それぞれが本来の機能を果たすべく協働する医療です。また、医療機関としては、限られた医療資源のなかでご本人様やご家族様の希望が叶えられるように調整していくことが求められていると思います。

私の夢の一つに、当院にて在宅ホスピスを行えるようにすることがあります。在宅ホスピスとは、医師や看護師のチームが患者様のご自宅を訪問し、ご家族様と協力しながら、ホスピスケアをすることです。

望まれた療養場所の一つとしてご自宅が今以上に選択肢の一つとなりうるよう、在宅ホスピスの夢を実現し、地域医療に貢献していきたいと思います。

在宅医療
マーガレットクリニック



ボランティア　20年のあゆみ

ボランティアコーディネーター　東　のぞみ

ボランティアグループ「紫苑」は、1996年9月11日に発足し、今年で20年目を迎えています。手元に『私たちのホスピスを作った』（川原啓美編 1998年 日本評論社）という本がありますが、それによりますと、「愛知県にホスピスを」という呼びかけのもと、「あいちホスピス研究会」、「名古屋YWCA」、そして「豊田婦人ボランティア協会」（現「公益財団法人あすて」）が協同し、愛泉会職員と共に「愛知国際病院にホスピスをつくる会」が立ち上げられました。そしてその「つくる会」から希望者が募られ、ボランティアグループ結成へとつながっていきました。

当初、33名のボランティアが登録し、1日1～2名ずつの参加で、まずは病院本館の受付にて活動が始まりました。開始から今日に至るまで、毎日の活動記録が残されており、初日には、「緊急の患者さんへの対応、面会者の案内、待合室の椅子出し、小児科待合のこどものお世話、担架・車いすの片づけ、荷物の一時預かり」と書かれています。雨の日には、濡れている方にタオルをお貸ししたいと思い、次に備えてタオルを用意したことなどが感想として残されています。患者さんにどんなお手伝いができ

紫苑と共に20年の歩み

ボランティア　塚　田　　都

愛知国際病院ホスピスボランティアグループ紫苑の立ち上げから関わらせて頂き、今年で20年と伺い、もうそんな年月が？という心境です。遠い昔をなつかしく思い出そうと・・・悲しいかな記憶がおぼろげなところ多々のこの頃です。

自分の人生の中で何か新しいことを始めたいと思っていた時、導かれ受け入れられて気が付けば患者さん、ご家族のおそばにおりました。当初は思いだけが先走り、何もかもが手探り状態で緊張の連続だったように覚えています。でも、疲れ果て心痛める患者さん、ご家族に、笑顔とさわやかな風をお届けするようにと、日常の自分からモード切り替をして毎週ホスピスへ通って来ておりました。

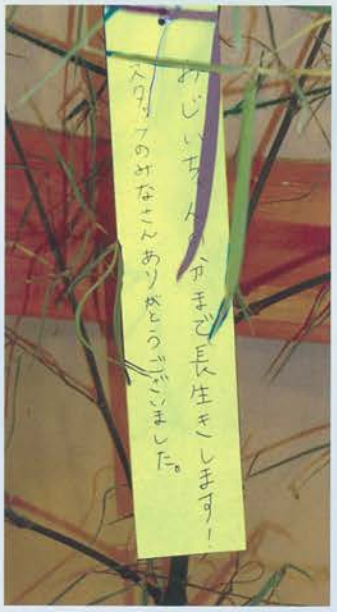
そして多くの出会い、別れがあり、他の人のために尽くせる喜びを知り、今を大切に一日一日を丁寧に生きることを知り、本当にたくさんのことを学ばせて頂きました。

20年も続けていられることには、受け入れて下さった愛知国際病院に感謝し、支えてくれている家族に感謝しております。この先どれくらい続けていかれるかは分かりませんが、私なりに体調管理に気を付けて、これからもホスピスに合った一番大切な優しさ、知性、感性を磨いていたいと思います。そしてこれからの次世代を担う若い方々に受け継いで頂き、お一人でも多く精神的な成長の喜びを感じて頂けたらと思います。

るかを模索し実行に移す、ボランティアならではのあたたかなまなざしと、行動力を感じます。その後少しずつ活動範囲が広がり、病院内外の環境整備や待合室の本の拡充なども行われました。そして開始から1か月後の記録に、こう残されています。「・・・笑顔でニコニコ挨拶し、（患者さんが）気軽にお話しできる、病院の潤滑油のようになれたらよいと思いました」。また患者さんから、「ボランティアさんいいですね、そこにいらっしゃるだけでいい」と声をかけられ、うれしかったという感想もあります。こうした患者さんとの出会いや、活動経験の積み重ねを通して、病院の中に医療者ではない、「普通の人がそこにいる」ことの大切さがボランティアの中で確認されていき、それが今日のホスピスにおける活動へとつながっているのだと感じています。

「紫苑」という名称は、キク科の多年草に由来します。「何気なく咲いている野の花ですが、その姿から力強さとつつましさを感じます。野をわたる風のような、そんな自然なボランティアになれたら・・・」という思いを込めて名付けられたそうです。20周年を迎え、紫苑を様々な形で支えてくださった方々や、力強くそしてつつましく活動を続けてこられたボランティアのお一人おひとりに、改めて感謝と敬意を表します。

これからも、ホスピスでのケアがより豊かなものとなるよう、一人ひとりが成長すること、そしてお互いさまの気持ちで多様性を受け入れ合いながら、日々の活動が継続することを願いつつ歩んでまいりたいと思います。



ボランティア活動を通して

ボランティア　鈴　木　和　子

「年が越せるのね！」「本当ね。年が越せるのよ！うれしい！！」

この会話は、ホスピス病棟の患者様のご家族から発せられた、喜びの言葉でした。そのご家族でもないのに何故か涙を浮かべながら、笑顔でうなずいて応えていました。

ある年の12月31日午後4時過ぎ、アレンジ花をお正月模様に切り替えるその瞬間の事でした。この光景のお陰で、早20年ホスピスボランティアを続けさせていただいています。

また、ある友人の親御さんが、ホスピス病棟に入院されてみえた時のことです。ボランティアが患者様とともに付添いのご家族にもティータイムにお茶菓子を振舞います。「毎日、ティータイムに向けて病室に顔を出していたのよ。あのひとときがあったから、最期まで笑顔で見舞えて、父も安心して穏やかな顔で、本当にうれしかった。」と言ってみえました。

患者様の中には、押し花の先生、ピアノの先生、絵画の先生など様々な先生がみえ、皆さん、ホスピスの多目的室を利用して、展示会や発表会などをし、また、お孫さんの結婚式に参列したいということで、ホスピスで結婚式を挙げ喜んでいらした方もみえました。

最期を実にその方に相応しい過ごし方をされ、皆さん充実した笑顔でした。

ボランティアを通して、自分が生かされていることに感謝し、いつも新しい自分、成長している自分に出会える様に日々を大切に生活出来たらと思っています。

「地域と共にあるあたたかい病院」の継続を願って

あいちホスピス研究会　代表　永　井　照　代

６月、ホスピスで開催されたセミナー、「ホスピスってなあに？」に参加させていただきました。

愛知県にはなかったホスピスの設立を願い、仲間と「あいちホスピス研究会」を発足したのは1993年でした。「愛知県がんセンターに」との願いで、請願署名活動をしましたが、当時、県として設立の予定がありませんでした。そんな時、川原先生が『市民と共にホスピス作りを』と呼びかけて下さり、ＹＷＣＡ、豊田婦人ボランティアの方達と『愛知国際病院にホスピスを作る会』に参加させて頂きました。募金活動などを経て1999年、ホスピスが設立された時の感動は今でも鮮明に覚えています。

私達の会には「愛知国際病院のホスピスで家族が、知人がとても温かい医療を受け嬉しかった。感謝している」という声がたくさん聞こえてきます。その度に、設立に関わらせて頂けたことを嬉しく、誇りに思っています。

セミナーのプログラムが進むにつれ、私の脳裏に、設立までの事や入院した患者さんや、ご家族のみなさんから届く声が浮かんできて、何度も胸が熱くなりました。共に活動してきた患者さんたちの中に、「ホスピスで最期を」の願いが叶わないまま旅立たれた方たちもありました。

セミナーが終わって、私は玄関に飾られたさおり織りの、＜太陽の輝き＞を感じさせるＴさんの作品の前に立ちました。Ｔさんはさおり織りの先生で、患者さんでもありました。年月が経ち転移など病状は進行していきました。「もう一回だけ新しい治療にかけてみる。最期はホスピスでと決めているから」との願いは叶わず、彼女は治療半ばで旅立ちました。

私は、川原先生の『地域と共にある病院』という言葉がとても好きです。川原先生の思いを引き継ぎ、これからもずっと変わらない『あたたかい医療』をと願っています。

明日葉の会へのお誘い

明日葉の会は、愛知国際病院ホスピスで大切な家族の看取りをした方々が集まり、思いを声に出し、分かち合う会です。「明日葉」という植物は、今日摘んだ芽が明日には伸びてくるというほどの生命力の強い植物で、それにあやかり会の名前としました。家族を看取られてから半年以上を過ぎた方を対象として、偶数日の第３土曜日午後２時から４時、病院の一室をお借りして例会を行っています。続けてこられる方も、しばらく間を空けてこられる方もおられます。ご都合のつく時にご自由にご参加ください。詳しくは、下記までお問い合わせください。

お問い合わせ先：愛知国際病院ホスピス　電話　（0561）73-7721（代）
（担当）　太田一道

あいちホスピス研究会に参加して

ホスピス医師　大　村　浩　之

2016年4月24日、あいちホスピス研究会公開講座が開催され、山崎章郎先生が「在宅緩和ケア～ケアタウン小平クリニックの取り組み～」との演題で講演されました。私は司会者として大変緊張していましたが、講演前の控え室で山崎先生の柔和な雰囲気に包み込まれて緊張がほぐれ、何とか無事に務めることができました。

山崎先生は外科医として一般病院における終末期医療の改善に取り組み、1990年にベストセラー「病院で死ぬということ」を著してホスピスの必要性を全国に広め、自らホスピス医として14年間勤務されました。その後、「ホスピスケア＝人間の尊厳を守るケア」の考えのもと、2005年にケアタウン小平クリニックを立ち上げられ、がん以外の患者さんも対象とした在宅ホスピス医として「最期まで人権を守られ、尊厳と自立を持って人間らしく暮らせることを保証するコミュニティ」の実現に努めておられます。講演では、ホスピスケアで重要なポイントをわかりやすく講義された後、在宅ホスピスのメリット、独居の人を地域で支えるシステム、「住み慣れた所で安心して生きること、死ぬことを考える」地域住民との勉強会、子育て支援活動まで具体的に説明されました。おそらく講演を聴いたほとんどの人が、「自分の住む町にも『ケアタウン小平』があったらいいな」「こういう活動が日本中に広がればいいな」と願ったと思います。しかし、「山崎先生だからできたこと」「自分たちで実現するのは無理だろう」と感じた人も少なくなかったと思います。

講演終了後、山崎先生にサインをお願いしたら「いのちといのち共に支え合う！」と書いてくださいました。山崎先生は医療・福祉という枠を越えて人間同士が支え合う地域社会の実現を目指しておられると感じました。相手を思いやり、相手のために自分に何ができるかを考える。そんな思いで目の前の人に接して、お互いに助け合うことができれば、一人一人は微力でも第2、第3の「ケアタウン小平」が実現できるような気がします。地域社会の一員として生きるうえで一番大事なことを教えていただきました。

賛助会　報告と募集

収支報告

収入		
賛助会 250口		2,654,240
支出		
研究・研修費		346,226
環境設備費		1,049,370
消耗品費		393,582
食材費		254,505
広告通信費		482,332
建築費補填	運営費	128,325
支出合計		2,654,240

会員募集

愛知国際病院ホスピスでは、賛助会員を募集しています。アメニティの充実（設備環境、造園、園芸）、ホスピスでの諸行事、ホスピス相談の充実、広報啓蒙活動、家族会の開催、ボランティア活動、教育活動等のために是非ご協力をお願いいたします。（ご入会頂いた方には、年4回発行の病院だより「みなみやま」と年1回の本誌をお送りいたします。）

入会方法　下記の口座に会費をお振り込みください。

郵便振替口座 00890-5-3757　口座名義 愛知国際病院ホスピス賛助会

1口1000円（おいくらでも結構ですが、できましたら5口以上でお願いいたします。

編 集 後 記

先日、地域の看護師とともにエンド・オブ・ライフ・ケアの勉強会を開催しました。講義、ロールプレイ、事例検討とあわただしいプログラムでしたが、参加者のみなさんとケアを考え深める機会になりました。患者さんとご家族が安心して日常生活を継続できるよう、個々の働く場所でケアを提供する看護者の繋がりも大事にしていきたいと感じています。

ホスピス師長・緩和ケア認定看護師　　成田昌代

発行編集責任者：太田信吉　　編集委員：井手　宏　大村浩之　成田昌代